

# *As You Like It* についての一考察

## — 自然と人間 —

### 則藤 力

*As You Like It* という作品はロマンティック・コメディ一群の中でも、牧歌劇(Pastoral Play)としてしばしば言及されるが、その呼称は作品が醸成する世界像をいささか歪めてしまうのではないかと思われる。というのもパストラル文学とされるものは、おおむね<都市>と<田園>、<人工>と<自然>といった対比の中で、牧歌的田園生活やその世界が賛美され、理想郷としての自然への憧憬が顕著である。ところがこの作品は必ずしも牧歌・田園の世界を賞賛しているとはいいがたい面が多分にある。確かに牧歌・田園の世界と、都市・宮廷の世界が対照されてはいるが、むしろそれを「異化」することによって、笑いの裡に人間の<愚行>と<現実>を、人間存在の在り様を照射していると言ってよい。

なるほど共通の形式とか構造のもとに主題の意味を展開したり、体系づけようとしたりすることは作者の世界像を明確にするかもしれないが、とたんに逆例が噴出してきて、その範疇からはみ出るものは削除するか、牽強付会になる場合が多い。それよりはむしろ、個々の作品を独自のものとしてそれぞれの有機的形式、すなわち喜劇を支配している情念を見出し、それから示顕される行動と結びつけることを通して様々なモチーフの構成と特質を探り、その意味と劇の全体像を検討してゆきたい。

第一幕第一場に示されるのは、カインとアベル以来繰り返されてきた兄弟の争いのモチーフである。そこに巣くうものは、他者を羨み妬む人間存在の暗い一面であるが、それは己の存在の座標を見失った、いわば自己疎外に陥った人間が存在の確証を求めようとする〈自我〉の主張と言ってもよいであろう。それが知恵ある解決に向かわないとき、悲惨な結末へと押し流されてゆくのは、詩劇や悲劇に見られる通りであるばかりか、そのように愚行は人間の拭いがたい〈現実〉でもある。

Sir Rowland de Boysの末息子Orlandoの嘆きは、兄Oliverが父の遺言通りに処遇してくれないことにあるらしい。すなわち二番目の兄Jaquesは大学に行かせてもらい、すばらしい成績をあげているとの評判を得ているのに比べ、自分は家に閉じ込められ、「何一つしてくれない」だけでなく「自然が与えてくれたものまで取り上げ」、「下男たちといっしょに暮らさせ、弟という地位から閉め出している、そして全力を尽くしておれの生まれのよさを育て方の悪さでくつがえそうとして」おり、牛馬以下の扱いしか受けていない、と老召使いAdamに不満を述べる(I. i. 1-25)。Orlandoの視点からすればそうであろう。

ところが兄Oliverから見れば「おれは、どういうわけかわからないが、あいつほど心底憎いと思うものはない。あいつには、紳士の風格がある、学校に行かないのに学がある、日頃の心がけは立派だ、身分の上下を問わずだれからも惜しみなく愛され、人気の的になっている、特にあいつをいちばんよく知っているおれの家来どもに慕われており、お陰でおれの評判は形無し」(...; for my soul—yet I know not why—hates nothing more than he. Yet he's gentle, never schooled and yet learned, full of noble device, of all sorts enchantingly beloved, and indeed so much in the heart of the world, and especially of my own people, who best know him, that I am altogether misprised. I. i. 163-69)なのである。

一方にとっては邸に閉じ込められているという閉塞状況が、他方にとっては相手の評判の良さが、それぞれの存在感を揺るがしていると言えよう。言い換えれば、都市社会の中で二人は己の座標に確信を持たず、自己疎外に陥っていることを示している。これは都市という文明の生成の行程に内包される、人間存在の空洞化現象に他ならない。例えば、

Oliver: Know you where you are sir?

Orlando: O sir, very well: here in your orchard.

(I. i. 40-1)

という会話に象徴されるごとく、彼の視座は文字どおり「果樹園」(orchard: enclosed piece of land in which fruit and trees are grown)という組織された社会機構（垣で囲われて保護され、労働を投入された土地）の中に閉じ込められている。無論それが、あらゆるゲシュタルトを生み出していく力を内蔵していればともかく、運動が静止に向かえばその閉塞性から自己を解き放つ方向へ向かうのは当然であろう。かくしてOrlandoが「自分の運命を切り開くべく出ていく」のは、新公爵の宮廷で開かれるレスリングの御前試合である。

他方、取り入るために訪ねてきたレスラーのCharlesからそのことを知ったOliverは、己の座標を揺るがす存在を排除する機会到来とばかり、弟を恥ずべき卑劣な人間だとして罵り、命を奪ってもかまわないとまでCharlesをけしかける。しかしながら、弟への誹謗はOliver自身にこそ当てはまるものに他ならない。

..., it is the stubbornest young fellow of  
France, full ambition, an envious emulator of  
every man's good parts, a secret and villanous  
contriver against me his natural brother.

..., he will practice against thee by poison, entrap  
thee by some treacherous device, and never leave thee  
till he hath ta'en thy life by some indirect means  
or other.

(ibid., 140-51)

己の存立が他者によってしか確証できないとすれば、この喜劇的状況は、他人を中傷する言葉が天に向かって唾することだと気付かぬ人間の＜愚行＞とともに、人間存在の悲劇的にして喜劇的なく現実＞の一端を見事に映し出している。そしてこのような羨望、へつらい、中傷、陰謀といった欺瞞や権謀術策の渦巻く都市（宮廷）社会像は、兄公爵を宮殿から追放して政権についているFrederick公と、忠臣を率いてアーデンの森に逃れている公爵との兄弟関係にも象徴的に示されており、結局それは、文明社会が熟成から腐敗へとたどる必然的サイクルに呼応している。

実際OrlandoがレスラーのCharlesを御前試合で負かしたとき、敵方のSir Rowland de Boysの末息子だと分かるや、Frederick公は不快感を示し試合の結果を無視する。それもOrlandoの「父親が立派な人物との世評を得ていた」(The world esteem'd thy father honourable, I. ii. 214)からという理由のために、彼のいわば社会的存在を封殺したわけである。

他方、御前試合に勝って運命を切り開くどころか、逆に妬み深い仕打ちを受けたOrlandoを待ち受けていたのは、彼の評判を憎む兄Oliverが弟を睡眠中に焼き殺すつもりだという、召使いAdamの知らせであった。このように二組の兄弟の憎しみや争いは、自己の存在の何たるかを鏡に向かって写し見ることのできぬ人間の＜愚かさ＞を露にしている。これはいわば＜都市＞という＜人工＞の世界に、＜文明＞に、内在する生成過程の必然なのか、それとも人間が本来持っている＜自然＞なのであろうか。

いずれにせよ、他人の立場に立って考える想像力の欠如した、従って疑い、妬み、憎むという疑心暗鬼に満ちた都市（文明）社会は、Adamの言葉

通り「人間の住むところではなく、屠殺場にしか過ぎない」(This is no place: this house is but a butchery. II. iii. 27)。娘Celiaの説得にも耳も貸さず、Rosalind追放を宣告したFrederick公の姿は、相手を抹殺せずには安心できないOliverの姿とも相俟って、いったん踏み込んだが最後、渦巻く疑念の泥沼にはまってゆかざるを得ない、人間の<傲慢>と<愚行>とを浮き彫りにしている。

She(Rosalind) is too subtle for thee, and her smoothness,  
Her very silence, and her patience  
Speak to the people and they pity her.  
Thou art a fool; she robs thee of thy name,  
And thou wilt show more bright and seem more virtuous  
When she is gone.

(I. iii. 73-8)

結局、法律や礼儀作法といった様々な規則に秩序だてられた様に見える都市（人工）社会の生活は、一面では豊かで洗練されているかもしれないが、他方、そのために<自然>の一部としての人間存在を忘れ、自己の根底にある現実を見失う結果を招かざるを得ない。その結果、Rosalindは「世間の評判の良さ」故に叔父Frederickから追放され、またOrlandoも兄の奸計によって存在場所を喪失し、ともに社会から座標を抹殺されたわけである。このように第一幕では、<都市>という<人工>の世界で、ともすれば自己の座標を求めようとして欲望に支配される結果、自己満足や自己疎外に陥りやすい人間の姿が提示されている。

## II

そのようなおぞましい世界にあって、ただ一筋の銀糸のごとく全編を貫

いているのは、姉妹同然に育てられた従姉妹同士のRosalindとCeliaの信頼関係の美しさであろう。それは二組の兄弟のみならず、人間の内面に巣くう醜悪で病的な欲望に駆られた世界に鏡を差し出し、人間存在の実体と属性を見事に映し出している。殊にRosalindの辛い立場を思いやって、ともすれば沈みがちな彼女に心優しい気遣いを示すだけでなく、その後の不自由な森での生活をも堪え忍び、終始献身的な愛情を示すCeliaの姿は、醜さとは反対に人間の美しさ、素晴らしさを感じせしめて充分である。例えば、父の追放宣告に対してRosalindをかばうだけでなく、彼女の追放は娘のそれでもあるとして、Celiaは伯父たちの隠れ住むアーデンの森へ一緒に逃げようと提案する。それも「喜んで、追放ではなく自由への道を歩むのだ」(Now go we in content / To liberty, and not to banishment. I. iii. 133-4)として。

確かに「美德が返って身の仇になる」(Their graces serve them but as enemies. II.iii. 11)ような宮廷を中心とした<都市>の<人工>世界であれば、<森>という<自然>はある意味で<自由>な空間かもしれない。しかしながら、「油断も隙もない宮廷よりも危険が少ない」(Are not these woods more free from peril than the envious court? II. i. 3-4)とは限らない。因みにクーデターによって宮廷を追放された兄公爵にしても、「氷の牙をむき荒々しく怒号する真冬の風が、この肌を刺し、この肉に食い入り、ついには寒さでこの体が縮こまる」ほどの苦しみを森で味わわねばならなかった。またRosalindたちの一行にしても、息絶え絶えに羊飼いに助けを求め、生活のための牧場を購わねばならなかったし(第二幕第四場)、OrlandoとAdamたちも、森の野獣に食われるか、それともそれを食って生き延びるかの瀬戸際に立たされたのである(第二幕第六場)。

だとすれば、<森>が法の保護を奪われ、人間社会から追放された人たちの隠れ場(アジール)であった、という意味では<自由>かもしれないが、食うか食われるかの危険性を秘めている点は、<都市>にも、森という<自然>にも通底している。従ってこのアーデンの森は、文学的伝統に則ったアルカディアとしてよりも、葛藤と生成を含んだ現実の森としての

要素が強調されており、作品自体伝統的な＜牧歌劇＞とは趣を異にしていると言える。

しかしながら一方では、喪失した自己の発見と再生をもたらす理想の風景として、現実社会を批判するという機能を合わせ持った変則的な構造をも持っている。例えば「飾りたてられた栄華の暮らし」ではあるが、「油断も隙もない宮廷」よりは自然のきびしさの中での暮らしの方がまだ、と述べる第二幕第一場冒頭の兄公爵の台詞に端的に示されており、更に、森で暮らすようになって「アダムの受けた罰、四季の変化」を感じ、慣れてみれば冬の風も「宮廷の追従ではなく、忠臣の諫言であり、己が何者であるかを痛感」（第二幕第一場、10-11)することになった。

And this our life, exempt from public haunt,  
Finds tongues in trees, books in the running brooks,  
Sermons in stones, and good in everything.

(II . i. 15-7)

なるほど彼の言葉の特徴は「石に枕し、流れに漱ぐ」といった類の、当時の知識人や宮廷人の間で流行していた文人的常套句のきらいはあるが、兄公爵の＜視座＞の変革を多少なりとも反映しているのも事実である。というのも、かつては鹿狩りは娯楽に過ぎなかったが、今では自分たちが生きるために殺されねばならない鹿に対して、同情を示すほどに変化している。また、飢え死にしそうになったOrlandoが剣を片手に食べ物強奪しようと闖入した際、事情を知るや食料を分かち合い、不幸なのは自分たちだけではなく、「この広大な世界という舞台の上では、我々が今演じている場よりもはるかに悲惨な芝居が演じられている」（第二幕第七場、137-9）という台詞にも認識の変化を窺うことができる。一見するとこれは＜自然＞が人間の内省を促し、己の本分を教え、互いに助け合う人間の＜自然＞を喚

起する、牧歌の常套的価値の構造に見えるかもしれない。

ところが、たとえそのように変化したとしても、「ふさぎ屋」と呼ばれる Jaques の〈視座〉から見れば、彼を追放した弟よりも「更に上手の篡奪者だ」として批判される。なぜなら「獣どもを自然から授かったその居住地において脅かし、殺しさえしている」（第二幕第一場、62-3）からだという訳である。理論的にはその通りかもしれないが、問題は限度であって、自らも鹿の肉を食べて森に棲んでいるのであれば、所詮 Jaques も自然保護主義を標榜する、いわゆる評論家に過ぎないのではなかろうか。

無論それが意義のないことだとは必ずしも言えないが、「心のままにもの言う特権」を許されても、毒舌を浴びせることで「疫病にかかった世界から病毒を一掃」（第二幕第七場、58-60）することなどできはしまい。その点について、兄公爵も「人の罪を責めるというもっとも忌まわしい罪」だとして、Jaques に手厳しく反論する。

For thou thyself hast been a libertine,  
As sensual as the brutish sting itself,  
And all th'embossed sores and headed evils  
That thou with licence of free foot hast caught  
Wouldst thou disgorge into the general world.

(II . vii. 65-9)

いずれにしても、Jaques の風刺やペシミズムは、都市・文明の〈人工〉の利便さに、人間が〈自然〉の一部であることを忘れて〈傲慢〉に、〈愚行〉に陥ったことへの批判となっていることも事実である。例えば矢傷を負った牡鹿をいたわるどころか、仲間の群が素知らぬ顔で見捨てて去って行く光景に、「さっさと行くがいい、肥えて脂ぎった町人ども、これがこの世の習いだ、衰れにも打ち砕かれた破産者などにいちいち目を止めることはない」(Sweep on, you fat and greasy citizens, / 'Tis just the fashion.



Wherefore do you look / Upon that poor and broken bankrupt there? II. i. 55-7)と、<都市>社会の人間像に重ね合わせて日常生活の仮面を暴き、物質的な現実に囚われた人間存在の実体を痛烈に風刺していることから明らかであろう。

こういった状況から浮かび上がってくるアーデンの森は、<牧歌>のありきたりの通念を示していると言うよりも、宮廷や畑の世界に表象される文化にも属さない、異質なもう一つの世界、即ち試練を求めてやって来る隠者あるいは敗残者や逃亡者にとって、この世とあの世の境界であり、まさしくアジール（避難場所・聖庇）の観を呈している。というのも、<森＝荒野>はしばしば<都市>の価値観とは対立する価値を現しているからである。

例えばCorinに森の暮らしについて訊ねられて、「寂しいという点では大いに気に入っているが、わびしいという点では大いに気に入らん。田園生活であるという点では快適だが、宮廷生活じゃないという点では退屈だ」（第三幕第二場、15-9）と答えるTouchstoneの相対化した回答は、まさしく<宮廷・都会>人の典型そのものと言えよう。即ち日常性の中に埋没して硬直化していった意識である。その挙げ句Corinの田舎者ぶりをからかおうとして宮廷の礼儀作法を持ち出したものの、田舎の行儀が宮廷で物笑いになるのと同様、宮廷のそれも田舎では滑稽であって、価値観の相違に過ぎないのだと足下をすくわれてしまう。そればかりか、「・・・食うもんは自分で稼ぐ、着るもんは自分で手に入れる、人の恨みは買わねえ、人の幸せは妬まねえ、他人の喜びは自分も喜ぶ、自分の悲しみは我慢する。おれの一番の我慢は雌羊が草を食い子羊が乳を吸うのを見ることだ。」（第三幕第二場、71-5）と言うCorinの台詞は、Touchstoneの都会的知恵など地平の果てに吹っ飛ばすほどの迫力をもって響いてくる。

ひるがえってそのような異界へ投げ出された兄公爵の場合、たとえ「厳しく辛い生活」であっても、それこそ真の<楽園>だとする兄公爵の認識は、非日常性を通して価値観の転換がもたらされたわけで、それは<逃げ

場>であるばかりでなく、<試練の場>としての機能をアジールが果たしていることをも示していると言える。

この修道院文学に発する「荒野の楽園」的概念から透かし見えるものは、隠者や予言者のもとに助言を求めてやって来る王侯のイメージである。無論Jaquesは隠者ではないが、兄公爵が常に議論の相手として彼を求め、考えを聞きたがる姿はその一変形と言えないだろうか。つまり、文化や社会の生成の過程でそのアイデンティティを作り上げる際に起こるひずみ、あるいはシステムの硬直化が進めばそれを破碎する力が働いて、一種のカオスがもたらされるのは必然であり、それを避けるために、あるいは回復するために王侯が魔術師、予言者、隠者などに助言を求めたことは、中世のロマンスにしばしば現れた主題であった。実際弟Frederick公が兄を捕らえて処刑しようとする森へやって来たとき、隠者に出会い問答を交わした結果、突如改心して旧に復した（第五幕第四場）ことにも現れている。こうしてみると、アーデンの森は理想郷としてのアルカディアというよりも、中世の伝統線上にあるアジールとしての現実的要素が色濃く現れている。

### Ⅲ

宮廷から田園へと舞台が移動することで、一見<牧歌劇>の様式をとってはいるが、これまで見てきたごとく、シェイクスピアは様々な<現実>を挿入することで異化作用を施し、相対化された世界を現出させている。しかも展開されるモチーフは、喜劇には珍しく重いもので、そこには牧歌の常套に対する批判的な問題意識が潜在していると思われる。即ち、宮廷と田園、自然と文明、現実と理想、といった対立する世界を併置しつつ、より複雑で多元的な世界像（価値観）を示しているのではなからうか。

そのことは森で繰り広げられる三組のカップルの恋愛のモチーフにも反映されており、それによって第三幕からは牧歌世界にふさわしい恋愛ゲームへと、見事に転調が施されている。ところがその伏線はすでに第一幕の

御前試合でのOrlandoとRosalindの出会いの場面に張られていた。そして兄の奸計を逃れて森に迷い込み、餓死寸前のところを兄公爵一行に助けられたOrlandoは、今や相まみえる可能性のない（と思っている）Rosalindへの思慕の情を下手なく宮廷風恋愛詩に託し、アーデンの森の樹木に掛けて回っている。それはあたかもJulietに出会う前のRomeoが、つれないRosalineを恋い慕っていた時の様を髣髴とさせる。というのも今や男装してGanymedeと名乗るRosalindのOrlandoをからかう台詞にも、courtly loveのパロディー化となって示されている。

A lean cheek, which you have not; a blue eye and  
sunken, which you have not; an unquestionable  
spirit, which you have not; a beard neglected,  
which you have not...

...Then your hose should be un-  
gartered, your bonnet unbanded, your sleeve un-  
buttoned, your shoe untied, and everything about  
you demonstrating a careless desolation. But you  
are no such man:

(III. ii. 363-72)

しかも彼女は、「恋は狂気に過ぎない」とその愚行を説きながら、それを治療するためと称し、自分をRosalindと呼んで口説かせるという求愛の真似事を提案する。つまりOrlandoの愛が真の愛か、それとも恋を恋する憂鬱病に過ぎないのかを確かめる巧みな策略であるが、RosalindがGanymedeという男を演じていると同時に、GanymedeがRosalindを演じるというこの重層性は、男性として恋や女を嘲弄し批判する一方で、女性としては恋する者の心情を満身に滲ませ、その乖離が大きければ大きいほど喜劇性を増すと共に、女の本性を一層露にするのに役立っている。

例えば求愛ゲームの当日、Orlandoが時刻に遅れると彼女はいらだち、益々恋心をつのらせ、やって来た彼を責めれば責めるほど彼女の恋情があぶり出されることになる。また、女の気まぐれや不実を並べ立てて彼を試す冷静さと洞察力を持ちながら、時折アイデンティティーの混乱を来してしまうところにも恋する女の本心がほとぼしり出ている。

Orlando: Virtue is no horn-maker; and my Rosalind is virtuous.

Rosalind: And I am your Rosalind.

(IV. i. 60-1)

その一方で、恋のために死んだ男はいないとか、女の不実さや恐妻化する結婚生活の実態などを持ち出して彼の誠意を試した彼女は、ついに言葉ではなく行為で示すことを要求する。つまり、今度会うときは約束の時間に遅れないようにと釘を差す。しかしながら遅れて現れたのは、弟を殺そうとまでした兄Oliverを救うために、ライオンと戦って負傷したOrlandoの血染めのハンカチであった。約束は果たせなかったにもかかわらず、最終的にRosalindとOrlandoを結びつけるのは、復讐に走らず結局は兄の命を救ったという彼の人間性に他ならないと言えよう。

他方、羊飼いのSilviusが言い寄れば言い寄るほどつれなく逃げ回るPhebeたちの姿、更にそのPhebeがGanymedeを恋し追っかける姿もまた、宮廷風恋愛をボッカチオ風に滑稽化していると言えよう。三つ巴になって惚れたり、嘆いたり、怒ったり、追っかけ合ったりするこのような恋愛ゲームは、*A Midsummer Night's Dream*における恋人たちと同様、いわば<森>の魔性をもたらすリビドーの解放された世界を示しており、現に「人間には情欲がつきものだ。結婚と云って、鳩がくちばしを突っつき合うように、いちゃつき合うだけのこと」(第三幕第三場、72-3)と恋愛の即物的な面を強調するTouchstoneとAudreyの猥雑な場面と共に、結局<宮廷風恋愛>の戯画化に連なっている。とはいえ、愛は不死の欲求であり、それ自体が不

死の精霊なのである。なぜなら「地上にあるものごとく相和するとき、喜びは天にこだまし満ちあふる」からである。

Hymen: Then is there mirth in heaven,  
When earthly things made even  
Atone together.

(V. iv. 107-9)

このようにアーデンの森では、社会の規制から解放されて、すべての価値が相対化され、愚行が暴かれ試される。〈愚かさ〉は人類が抱えてきた病気であるが、それは人間性の〈自然〉を抑圧してゆこうとすると、あたかも人間の意志の統制に服さないものが働くからである。つまり、愛と想像力の欠如は、人間性の枯渇を、ひいては社会の逼塞を招かざるを得ない。そのことは兄弟の争いや、宮廷の陰謀術策に象徴されたとおり、〈傲慢〉と〈愚行〉となって現れた。森という自然はそれを暴き、試し、回復させる癒しの場であって、決してアルカディアのそれではない。森の生成が内包する葛藤が自己を認識させ、自己を形成してゆくのである。

例えばRosalindの宮廷から森への移行は、男の仮面を被らせることによって自己を解放せしめ、あらためて自己を認識させることになった。殊に彼女の場合、他の喜劇の女性と比べて、自己形成を自覚している女性として際だっており、それが彼女の大きな魅力ともなっている。

その意味では森は一つの舞台であり、Jaquesは人生を七つの段階に腑分けして見せたが、人は〈自然〉のままに生きるのがよいのだ。まさしくモンテーニュの言うごとく、「人生それ自体では善でも悪でもない。やり方次第で善の舞台とも悪の舞台ともなる」のだから。

For God shall bring every work into judgment, with every secret thing,  
whether it be good, or whether it be evil.

(Ecclesiastes, 12:14)

テキスト

*As You Like It*, (ed.) Agnes Latham, (London : Methuen, 1975)

参考文献

Champion, Larry S.: *The Evolution of Shakespeare's Comedy*,  
(Harvard U.P., 1973)

Smith, James : *Shakespearean and Other Essays*,  
(Cambridge U.P., 1974)